

末木文美士著

『草木成仏の思想——安然と日本人の自然観』

(サンガ・二〇一五年)

船田 淳 一

本書は日本仏教思想史研究を、常に牽引してきた末木文美士氏の最新の単著である。形式としては小型で安価な入門書の部類に入るだろうが、非常に充実した内容に仕上がっている。

周知のように末木氏は仏教学を基礎としながら、その問題関心と研究の守備範囲は、今や古代から近・現代までの日本宗教思想史全般（もちろん日本のみに留まらないが）に渡る誠に応じた大なものとなっている。末木氏は法然教学の研究からスタートしているが、博士号を取得したのは、平安前期の天台宗の学僧たる五大院安然の研究によってであり、安然は末木氏によって思想史上の価値を再発見された人物とも言える。そしてそれは『平安初期仏教思想の研究——安然の思想形成を中心として』

(春秋社、一九九五年)という大著として既に世に問われており、本書で主題となる草木成仏思想も、そこで専門的に分析されている。本書の「あとがき」によれば、環境問題の深刻化を受けて、当初はこの前著を書き直して刊行する心づもりであったようだ。しかしその間に、あの東日本大震災の衝撃があり、そのことが本書に対して、前著になかった特色をも与えることとなった(主に四・五章)。

二

まず始めに本書の構成を示すと以下のようである。

第一章「山川草木」と「草木国土」

第一節「山川草木悉皆成仏」は間違っている／第二節草

木成仏論の前提／第三節忘れられた大思想家安然

第二章 草木は自ら発心・成仏するか——『斟定草木成仏私

記』の世界

第一節『斟定私記』の成立と概観／第二節さまざまなる草

木成仏説／第三節心の真理と草木成仏／第四節草木成仏

論の深化／第五節密教的草木成仏論へ

第三章 草木成仏説の基礎づけ——安然の密教思想と草木成

仏

第一節草木成仏論の解決に向けて／第二節すべてを統合

する「一即一切」／第三節根源としての真如第四節真如

と草木成仏／第五節真如の深みへ

第四章 日本人の自然観と草木成仏

第一節 本覚思想とその批判／第二節 密教と禪の草木論／
第三節 東アジアの思想と草木成仏／第四節 「自然」とは
何か／第五節 顕冥の世界観と草木成仏

第五章 自然と災害を考える

第一節 災害天罰論再考／第二節 日本人の災害観／第三節
自然の奥へ

付 現代語訳『斟定草木成仏私記』

あとがき

参考文献

つづいて簡単に内容を瞥見しておく。第一章では、「山川草木悉皆成仏」という流行語は仏典に根拠のない誤った造語であり、「草木国土悉皆成仏」が文献学的に正しいことを指摘する。また「草木」が本来は「非情」とされ、人間・動物を含む「有情」のカテゴリーから除外されており、そのような草木という存在の成仏を初めて正面から論じた、顕教的な初期安然の著作『斟定草木成仏私記』（以下『私記』）の重要性を説いて問題の所在を明確にすると同時に、安然についての基本的情報を提示する。

第二章では、『私記』を詳細に分析してゆく。そのために天台宗以外の宗派（華嚴宗・三論宗）が草木成仏をどう理解していたかを確認し、さらに中国の天台宗における草木成仏につい

て論じる。それぞれの主張には差異があるが、大局的に言えば、いずれの立場も成仏の主体としての有情と、これを取り巻く客体である草木といった非情、すなわち環境世界は本質的に不二であるから、衆生が成仏すれば、それは環境・草木も成仏したことになるという理解である。安然はこれらを逐一批判し、あくまでも一木・一草の主體的な成仏（草木自成仏説）に徹底したこだわりを見せるが、その論理を充分に展開できないまま『私記』は閉じられ、課題として後期の安然思想へと持ち越されるとする。

第三章では、密教的な後期安然の『教時問答』を通して、彼が万物の根源たる「真如」を極めて重視したこと、真如の自己展開による世界生成論、「随縁真如説」に立脚し、真如を基体とする「一即一切」の思想を強調したことが論じられる。この論理の延長上に『菩提心義抄』の草木成仏論があり、「随縁真如」「一即一切」なるが故に、主体「有情と客体」「非情のごとき区別が取り払われ、人間が発心・成仏できるように、草木にもそれが可能であると、安然は結論づけたとされる。またここで末木氏が、安然における真如を（自然環境世界の奥底にある不可思議な根源的力）と把握した点に注目すべきであり、この真如観は次章に繋がる。

第四章は、そのタイトルにあるように、より幅広い射程で議論がなされており本書の白眉と言えよう。安然以降に展開する中世天台本覚思想における、草木はそのまま「永遠」「絶

対」であるから、もはや成仏を言い立てる必要さえないという「あるがまま主義」の立場や、これに対する証真による草木成仏説批判、さらに空海や道元が安易な形の草木成仏は認めなかったことなど多様な思想的立場に言及する。そして「自然と共存する民族」のごとき日本讚美の言説を否定し、前近代における（自然）の語義を確認しつつ、人間にとつての自然の「異質性・他者性」にも注意を喚起する。最後に議論は、末木氏が最近多用する「顕」「冥」という世界観とも交差し、安然の草木成仏論の核であった真如を、（冥Ⅱ他者の領域を掘り下げた先の先にある闇）というデーモニッシュな側面すら有する世界創造原理と観る、真如の哲学的把握の開陳に至る。最も氏の面目躍如たる所である。

第五章は、最終章であり、ここまでの周到な議論を踏まえて、末木氏自身が渦中の人となつた東日本大震災をめぐる「天罰論」という思想・言説について、改めて再説してゆくが、これについては後述する。

なお本書巻末には、専門外の人間には難解な『私記』を、できうる限り平易に現代語訳した本文が掲出されており、読者がよりダイレクトに安然の思想に接することができるよう配慮がなされている。

三

次に、評者なりの問題意識からではあるが、本書の議論をさ

らに吟味しつつ、その評価・若干の疑問点・所感などを、「真如の哲学」と「震災天罰論」にポイントを絞って述べる。

人間による破壊行為に対し自然環境保護が叫ばれて久しいが、自然に優しい（優れた）日本人とか、一神教と異なり自然を尊ぶ多神教（神道・仏教）とかいった、エコ・ナシヨナリステイックな言説は虚構に過ぎず、効果的な実践を結果できなかったことは、日本において当該の問題が深刻さを増してきていることに鑑みる時、明白であると言わねばなるまい。

かかる言説を「山川草木悉皆成仏」という造語で弘めた功績は梅原猛氏にあるわけだが、本書は国際日本文化研究センターに勤務してきた末木氏による、同センター顧問である梅原氏の卒寿祝いでもあるという（あとがき）。しかし冒頭の第一章において、「山川草木」か「草木国土」とかという一見すると些末にも思える事柄を、独善的な日本讚美に陥らないためにも、表現の差異として処理してはならないと、文献学的にこだわっている点からも、末木氏の立ち位置は明瞭である。

自然環境と人間の関係性、環境に対する人間の持つ責任をどう考えるか、この本質的な問題に直面する時、過去の時代の思想へとまず立ち返ってみることが、思想史家には要請される。末木氏の場合、このたび再度、安然へと立ち返り、改めて真如という問題系に逢着したのだと言え、特に三章五節「真如の深みへ」や四章五節「顕冥の世界観と草木成仏」には、井筒俊彦を再考する形で独特の思索が顕れており興味深い。「山川草木

悉皆成仏」と同じ呪文を繰り返しても、環境思想・環境倫理に展望は開かれないのであり、草木が成仏するというこの意味が、その論理基盤を徹底的に掘削する作業を通じて、どこまでも深く探求されなくてはならない。それが真如の哲学的把握ということである。

既に概観したように、安然是『私記』において草木自成仏を証明しようと努めたが十分に成功せず、後期著作では随縁真如説をもつてその解答に当たった。しかしそれは必ずしも分かりやすいものではなく、真如論による解決では『私記』の草木自成仏説がかえって見えにくくなってしまふと末木氏は率直に漏らし(二二二頁)、むしろ安然以降の本覚思想の説明の方が分かりやすいとも述べている(二二四―二五頁)。しかし本覚思想は「あるがまま主義」へと突き進んでゆく。

末木氏としては、安然の真如論にこそ意義と可能性を見出している。このことは思想史研究者の営為とは、価値中立的に過去の思想家の思想復元(再現)に勤しんだり、一歩進んでその復元した思想に価値判断や評価を加えたりすることに留まるべきか、或いはさらにその先にある過去の思想家の志向した地平——可能性の地平——という創造的な領域へと果敢に踏み込んでゆくべきか、という根本的な問いを導かずにはおかない(同じことは哲学研究にも言える)。末木氏は、安然是こう言った、こう考えたという次元を超えて、その真如論をいわば自らの課題として引き受けようとしている。安然思想の内包していた可

能性を現代の時空へと引出し、人間(自己)と他者(自然)の関係学たる「真如の哲学」(二五九頁)として、実践的に鍛え上げようとする姿勢を見せている点は、高く評価したい。

繰り返すが、単純に日本ないしアジアの特質とされるものを理想的モデルとした哲学(もどき)では、結局、仮想敵を生み、独善性・排他性を伴うのであり有効とは言えない。環境問題の場合、むしろ世界性を有するのであるから、いま日本の人文学の側からこれにコミットする場合、地域の伝統思想(安然/日本仏教)を他の文明と対話可能な形で再構築するという学問上の手続きが求められよう。末木氏は、「真如」と一神教的な「神」という項を立て(一五五頁)、日本の古典思想には、一神論の絶対神的な面は弱い、それを受け入れることのできる構造はあるとして、一神教的な神を組み込んだ「伝統思想に基づく世界観」という独自の図式を案出している(一五四頁)。なおほぼ同様の図式は、震災問題に多くの頁を割いている同氏「現代仏教論」(新潮社、二〇一二年)の五一頁に、既に掲載されている。

だが神学者マリオンと哲学者デリダの対論を引きつつ、マリオンによるキリスト教的な神からの「贈与」概念に対し、プラトンに基づくデリダの「コーラ」概念を東洋思想や真如に共通の方向性を持つものとし、西洋哲学の世界における「一神教的な神と場所的な真如の対抗」(二六二頁)と、末木氏が総括する点には、やはり従来からの思考パターンの拘束力を思わせる

ものがあり疑問が残る。従来型の図式が再生産される危険性は常に潜んでいる。むしろ一神教的な神と場所的な真如が「どこかでつがっているのかもしれない」（一六三頁）という可能性に向けて、困難を承知で比較思想的・哲学的に究明を継続してゆく他は無いと言うべきだろう。そこから環境思想・環境倫理をめぐる東洋と西洋の人文知が、真に対話・協同し得る道が開かれるのだと信じて……。

四

かくして本書は、新たな哲学の射程を示し、かなり抽象的な議論を展開するに至ったわけだが、最終章では一気にアクチュアルで具体的な問題を語り出す。

東日本大震災に際して、石原慎太郎東京都知事（当時）は、これを「天罰」と位置づけたため激しい批判が殺到し、早急に撤回された。末木氏も『中外日報』の記事（二〇一一年四月二十六日）において石原氏に与するものではないが、「天罰」という捉え方に一定の理解を示したため批判を招き、インターネット上で論争に発展した。ちなみに、こうした認識は既に「自然の災害は神の怒りの現れであり、人の力の及ぶものではない」として『仏教VS.倫理』（ちくま新書、二〇〇六年、一七一頁）にも見える。

この記事では、日蓮の『立正安国論』に説かれる「善神捨国」による災害＝天罰観を引用している。『立正安国論』は災

害天罰論の典型的なものとして扱われた感があり、震災をめぐる言説空間において頻繁に言及された。末木氏は被災地である福島県東日本国際大学で講演を行い（二〇一二年一月十一日）、その内容が「災害と日本の思想」と題して文章化され、東日本国際大学東洋思想研究所編『いわきから問う東日本大震災』（昌平堂出版会、二〇一三年）に収録されているが、そこでもやはり日蓮やその他の天罰論について語っている。

最終章には、二〇一三年一〇月五日の『中外日報』に掲載された「災害天罰説を再度考える——なぜ過去に学べないのか」が再録されているが、そこには以前の記事にはなかった（他者としての自然）概念が顔を出す。この他者性（「冥」の領域）の根源が、闇でもあるような真如なのであり、その真如とは自他の区別を超える（場所）であるから、「私たち自身の根源でもある」（一八二頁）ことになる。「災害天罰論」は、末木氏にとって時代錯誤な通俗的倫理や過去の迷信的発想ではなく、本書の主要テーマたる「自己と他者の関係論」の裡へと、位置づけ直されるべきものなのである。ここでは高橋哲也氏からの批判に対する応答も意味を持ったことであろう（前掲『現代仏教論』）。

最終章における震災の問題は、安然の草木成仏思想を通じて「真如の哲学」へと差し向けられた本書の議論の、一応の帰結としてあることが理解される。東日本大震災は、人文学系の学術雑誌でも多くの特集が生まれ、思想や哲学を練り直すための

契機となった（なるはずのものだった？）。末木氏の学的営為と本書も、それを体現するものの一つとして受け取ることが可能である。

ただし、今から優に千年以上も昔の安然の思想を再発見・再評価することに成功した本書の、その最後が「私たちが過去に学ばなければならぬことは、まだまだあまりにも多過ぎる」（一八三頁）と結ばれているのを目にすると、次のごとき歴史学者の北條勝貴氏から末木氏に呈せられた発言が、改めて評者の頭をよぎるのである。

日本の、世界の、人類の傲慢が災害を招いたとの主張は、一九六〇年以降に盛んになってきた、環境倫理を含む現代文明への批判的言説とも重なり合う。氏のなかでは、現代文明の傲慢／前近代の謙虚という二項対立が行われているようである。しかし前近代とは、本当に、末木氏が前提とするような謙虚な時代だったのだろうか。それは、空虚な失楽園の歴史観に過ぎないのではなからうか。

これは「過去の供犠——ホモ・ナランスの防衛機制」（『日本文学』二〇一二年四月号）という論文の問題提起の中の一文である。

天罰論の有する心理的な意味での暴力性については、幾らでも指摘されてきたが、ここでは天罰論が、歴史認識のスタンスとして深く問い返されている。思想史研究における天罰論の射程は、前近代の災害観念を史料実証的に跡付け、もって

近現代を相対化するということ以上に、歴史（過去）を叙述する研究者の〈倫理〉という領域にこそ達しなくてはならないのだ。天罰論は、「過去に学ぶ」という姿勢の意味を鋭く問いかけ、3・11以降の思想史叙述の有り方をも照らし出すのだ。末木氏が抱え込んだ天罰論は、本書を以ってしても、いまだ終わらず、残された問題としてあるように評者には思われる。

五

以上、本書は末木氏の従来からの研究対象であった安然思想の、草木成仏論を主軸にした概説化に決して止まらないものであり、著者なりに真摯にアクチュアルな問題とも向き合い、考えた成果であると評せよう。最近、末木氏は思想史から哲学へということ語っており、哲学者としての相貌を見せつつあるようだ。本書も、伝統思想をもとにした独自の哲学の構築途上にあるため、平易な語り口ではあるのだが、抽象的で分かりにくい所もある。とは言え、メッセージ性がやたらと先行する環境言説や、あたかも即効性があるかのように見せかけた環境思想は浅薄なものである。迂遠なようでも「常に根源に遡り、総合的な世界観の中で、自然を考え、そして人間を考えていかなければならない」（一八三頁）のは確かなことである。大澤真幸・成田龍一両氏の対談集『現代思想の時代』（青土社、二〇一四年）所収「3・11以降の〈世界史〉の哲学」では、震災以後の哲学・倫理学的知の無力や、思索の深まりの無さへの批判、

そして震災が忘却されつつあることへの危惧が語られる。その意味でも、立ち止まることなく考え続ける末木氏の、より完成した「真如の哲学」が登場してくる日に期待したい。

付記

ちなみに、本書の巻末「参考文献」にはビックアップとされていないが、草木を有情（人間）と同じ成仏の主体と捉える草木成仏論に、豊かな他者表象・自然への想像力という視座からアプローチしたものに北條勝貴氏「草木成仏論と他者表象の力」（長町裕司他編「人間の尊厳を問ひ直す」上智大学、二〇一一年）がある。また北条氏には、具体的な神話や神社縁起説話を分析し、人外の存在（動植物）へのポジショニングやヒト中心主義の相対化をめぐる諸論稿もある。末木氏と北條氏の立場は容易には交わらないのかもしれない。しかし本書を、他者性の根源たる真如の哲学へ向けた原理論とすれば、他者（自然）が如何に物語られるかを分析し、その担い手の存在にも切り込んでゆく具体論である北條氏の一連の研究は、有効な相補性を持つとも言えよう。

（金城学院大学准教授）

井上泰至著

『近世刊行軍書論——教訓・娯楽・考証』

（笠間書院・二〇一四年）

小川 和也

一 なぜ軍書は研究されなかったのか？

本書の「おわりに」に、「刊行軍書はその外縁たる、歴史と文学の境界」にある、と述べられているように、軍書は日本文学と歴史学の研究対象である。が、ここでは歴史学の立場から評したことを、あらかじめお断りしておく。

ひとつのエピソードから始めよう。

四年ほど前、北海道の大学に勤務していたとき、マイクロバスで学生たちと日高地方の平取町ひらとり二風谷にふうたにを訪れた。二風谷地区は沙流川沿いの山間部であった。そこはアイヌ民族の「聖地」である。かつて、アイヌの儀礼に重要な沙流川のダム建設には反対運動が起こった。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館と萱野茂二風谷アイヌ資料館を見学、その後、バスに乗り移動、ほどいかい義経神社に向かった。アイヌの聖地と義経神社。一見、なんの関係もないようだが、実はそうではない。この神社は、源義経が衣川の合戦